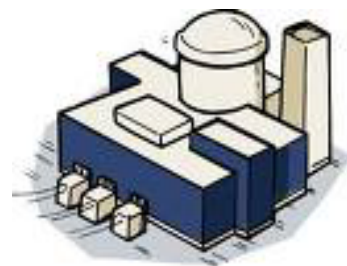
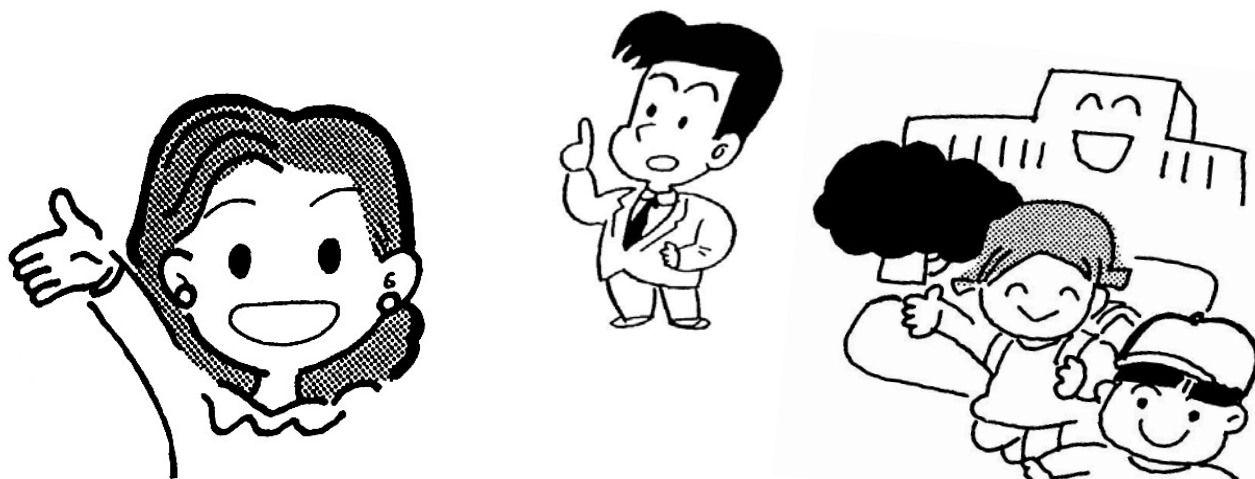


東日本大震災・原発放射能汚染の広がりの中で



「学校を安全・安心の拠り所に」

シンポジウム報告集と 学校・地域・行政への提言



5月7日(土)のシンポジウム 北多摩東教育会館

《パネリスト》

保育園の園長さん
ボランティア活動中の医療関係者
小学生のお母さん
中学生のお母さん
小学校の先生

主催：都教組北多摩東支部（武蔵野・三鷹・小金井・小平・調布・狛江・清瀬・東久留米・西東京の
180校の教職員が参加しています） : 042-384-2941

パネリスト 1 回目の発言



小学校の先生

地震の起きた時は、理科の授業の最中でした。すぐ子どもたちが火を消して机の下にもぐりました。ひどい揺れが続き「こわいよー、お母さん」という声もあがりました。

「学校は避難所になっている場所だから大丈夫です。安心して。」と言って落ち着かせ、校庭に避難しました。保護者などが迎えに来た子どもは引き渡しました。

100名近い子どもが残り、その後屋内に移動しました。そこに駆で「学校が避難所です」というチラシが配られたそうで、40名近い人々も避難してきました。

「うちの人はどこに勤めているの？」と聞いてもわからない子がいました。日によって勤務先が変わったり移動しながらの仕事など様々な働き方があるからです。

夕方になり、非常食の乾パンを配り、夜になってからはアルファ米を炊き（備蓄倉庫に水はなかった）毛布を出し、待機ができる態勢をつくりました。子育て中の先生たちは、わが子を迎えに順次退勤しました。

深夜になり、何時間も歩いて保護者が迎えにやってきました。最後の子どもが帰ったのは午前1時30分でした。

放射能汚染の心配から東京を離れてそのまま新学期まで登校しない子どももいました。6年生で避難したままで卒業式に出られない子が何人もいて、春休みに東京に戻ってから、その子のための「卒業式」を先生たちでやってあげました。

今回のことで、学校はいざというときの拠り所になると実感しました。

そのために 備蓄品の見直し、教職員の職住接近、地域の中の学校が求められると思います。



小学生の保護者

私は小学校5年生の子どもの親です。私は、アトリエで子どもを教えています。ひどい地震でしたがアトリエの子ども達がいつ来るかもわからず、連絡も取れない中、わが子を学校に迎えにも行けない状態でした。市のメール配信システムでメール配信に登録している保護者には、メールが届くはずでしたが、直後はほとんど通じない状況でした。

わが家には、長男が一人でいました。近所に住む発達障害のある子どもが、わが家に逃げ込んできました。パニック状態になっていて、テーブルの下に潜り込み出てこないありさまでした。

その子の親は、都内に勤め、電車は止まる、電話は通じないで連絡がとれない状態でした。夜中にやっと徒歩でたどりつきました。その子の学校は、家では子ども一人になることがわかっていて、帰宅させたようです。その学校の判断はどうだったのでしょか。学校によって対応が違い、すぐに下校させた学校があったそうです。

震災後、市内公共施設は夜間の利用を止めてしまい、子どもの活動が制限されてしまい困ってしまいました。また遊園地も電車も満足に動かない春休みとなってしまいました。

中学生の保護者

中学生の子どもがいます。PTAの会長もしています。中学生はそんなに地震によるパニックはなく6時半頃に帰宅しました。

私の知り合いから聞いた話を紹介します。その家は、小学校3年生と保育園年長組の子どもがいるのですが、父親は災害時には家に帰ってこられない仕事をしています。母親は都内で勤務していて、子どもから送られたガラス戸棚が

壊れた写メールを見て驚いたそうです。一刻も早く家に帰ろうとしましたが、電車も動かない、タクシーは長蛇の列、携帯電話は通じない、公衆電話も長蛇の列で使えない、やむなく徒歩で帰ってきたのだそうです。ウェブメールで9時頃ファミリーサポートで安全に過ごしているということが確認でき安心して歩くことができたそうです。帰宅したのは午前1時でした。こういうときの態勢ができていないことを実感しました。



保育園の園長

保育園では、0歳から2歳までの子どもを預かっています。当日はちょうど昼寝からめざめたところでした。子どもたちは泣きもせず、机の下に入って避難しました。こういうとき職員が大声を出したり、だれか一人でも泣き出したりすると、全員がパニック状態になり收拾がつかなくなるものですが、幸いみんな静かにしていました。私たちの保育園では、神戸研修を行って毎年2人ずつ派遣していて、それが役に立ちました。

子どもたちには着がえをさせ、おやつを食べさせました。お迎えの親が遅れることを予想して、ごはんを炊き、夕食の準備をしました。さらに子どもたちは昼寝用のふとん、残れる職員には非常用毛布を準備して態勢を整えました。深夜2時過ぎに歩いてきたり、帰れず翌朝引き取りに来たりした人もいました。最終の引き取りは、翌朝9時20分でした。

当日より困ったのは、計画停電、水問題でした。いつご飯を炊くか、冷凍庫はどうするか。水道水が乳幼児に使えないとなった時は、大慌てで薬局、コンビニを駆け回りました。日頃から親しくしていたおかげで、店で予備の品物を出してもらったり元職員の人が届けてくださったりと助けていただきました。地域の人に支えられているんだと感じずごく助かりました。

もう少し地震が大きいときには、親がケガな

どで子どもを迎えにこられない事態も考えられます。お母さんやお父さんが何日も戻れないこともあるかもしれない。

もう一步つっこんだ防災対策が必要だと痛感しています。その後お散歩の時間も30分にかぎる、行き先を確認するなどの生活を余儀なくさせられています。

医療ボランティア

私は立川の病院に勤めています。大震災のあと、すぐ医療チームが派遣され、私も宮城県の病院に入りました。40台もの救急車がいちどきにやってくるなどまるで野戦病院のような状態でした。トリアージを行い、そこで24時間ぶっ続けで働きました。

その後、避難所になっている文化センターに1ヶ月滞在しました。避難所として小中学校が使われていましたが、学校は区切られた部屋がいくつもあるのでとても使いやすく助かります。寝る時、着がえの時など部屋が大きいと対処しにくく困るのです。

テレビなどで避難所のようなすが報道されていますが、実態は伝えられていないと感じています。食事はほとんどコッペパンのようなパンだけです。おかずはありません。おにぎりが配られることもあります。冷凍保存されたものが完全に解凍してなくて、シャリシャリしたものを食べています。

心に負った傷は、たいへん深く、深刻です。ある子どもは、自分の親が津波で流されていくのを見て、そのあと精神的に不安定になってしまいました。津波で流されていく時は、波が高くなった時に流された人が水の表面に出てきて「助けてー」と叫ぶ、二度目、三度目と波が高くなった時に叫ぶが、四度目の時には無言になってしまうなど悲惨な話を聞きました。生き残った人が、助けられなかったことで心に傷を負っているのです。そういう人たちに安易に「がんばれ」と言ってほしくありません。

会場参加者からの発言

被災者の方に本当に必要なものは何ですか。学校で子どもたちに手紙を書かせる取り組みをしているのですが、はたしてよいのかどうか考えてしまいます。

医療ボランティア…送っていただくのは、寄せ書きのようなものが喜ばれています。避難所の壁などに貼ってみんなで見る事ができるのです。殺風景な避難所が明るくなります。

地域としてどのようなかわりかたができるでしょうか。「震災時引き受け親」のような制度はできないのでしょうか。私は、力仕事はできないが、子どもを引き取りに行く、預かるなどのことはできます。地域のシニア世代が手助けできるシステムづくりを望みたいと思います。

市報には避難場所として小学校が示されています。でも指定された市民全員が入れるのでしょうか。また夜間、施錠されているときに入れるのでしょうか。

私の市では、市が避難所マニュアルをつくらうとしています。今は、備蓄食は被災者の1日分しかなく、発電機は全小中学校にないし、市役所にもない。基本的に防災方針は「自力で」「相互扶助」となっているのは問題です。

地域の連携がどうしても必要となっていきます。協議会などを持っていこうということになっているがなかなか開かれません。地域の連携を日常的に持つていくためにはどうしたらいいのか考えています。

「相互扶助」ではどうにもなりません。公的な制度が必要です。ボランティア参加の交通費は政府が出すなどしてもいいのではないかと。

学童からは預かると連絡があったが、6年生の子はそのまま学校から帰されました。余震で家のガラスが割れてしまい、子どもは玄関でずっとお母さんの帰りを待ったという状況があったそう。学校ごとの判断だったそうだが、今後どういう風にしていったらよいか考えさせられました。

連休中に全教が募集したボランティア活動に参加してきました。海岸から3kmほど離れた町の用水路のヘドロを撤去する仕事です。実際に被災地に行ってみて



驚いたのは「におい」でした。猛烈なおい。すべてがなぎたおされた様子は、まるで被爆地の広島のような様子。ひどくつぶれた自動車町のあちこちにある。本当にいろいろなものがたまっていてものすごい臭いです。これから夏になっていく。

どんどん新しい問題が出てくると思います。自分に出来ることをやっていきたいと思います。



パネリスト 2回目の発言

小学校の先生

阪神大震災のときにボランティアを送り出す仕事や新潟の中越地震のときには現地に泊まり込んでボランティアをしました。その経験からいざというときに必要なのは耐震工事のされたしっかりした病院と学校だと思いました。ある養護学校は耐震工事がされていて地域の障害のある方々の拠り所になっていました。

また、避難所運営に参加できるように教職員の職住接近の人事異動しくみの見直しも大切です。

そして、(学区自由化ではなく)学区のある小中学校が大切なのではないのでしょうか。今回、先生が引率して一斉下校した学校もありましたが、学区があったからこそ出来たのです。

近所同士で声を掛け合って子どもを預かる家庭が数多くあった学校もありました。地域で助け合える体制をつくっておくことが大切だと思います。

小学生の保護者

ご近所で預かってくれる家庭があるととても安心できます。(うちに駆け込んで来た子のような)子どもに対応できるようなことも必要だと思う。

震災以来子どもを学校以外家から出さないようにした家庭もあると聞いています。

カウンセリング的な助けもたくさん必要になる時期にも来ているのではないか。子どもたちには、学校でぜひ(非常時の行動を)教えてほしい。

私は、みなさんの寄せ書きアースデイで車にペイントする。それを仙台に送る取り組みをしています。

中学生の保護者

東京に普通に暮らしている人間にとってテレビなどから流れてくる情報がすべてになってしまっていたということにショックを受けました。

今日知ったことをきちっと伝えたいです。家族で自分たちの身を守るための話し合いをきちんとしておくことが大切だと感じました。

身内にづらい被災した人たちがいるのだけでも前を向いていかなければいけないと思う。田舎にもなかなか帰れなくなってしまいました。原発の問題は本当に深刻です。



保育園の園長

地域に根ざした保育園でありたいと改めて思っています。今回、地域の人にどれだけ助けられたかわかりません。また個人的なことなのですが、福島に住んでいた親戚がわが家に避難してきています。福島にいなければ原発のことも忘れていられるのですが、実はとても深刻です。原発問題は原発問題として論議していかなければならないと思っています。

医療ボランティア

現地の方は、不安と困難を抱えています。風評被害も深刻です。ボランティアは、ニーズに応じて現地に送ってほしいと思います。

今の段階は、体力のある人が必要です。ガレキの撤去が中心だからです。それが一段落したらもっと細やかな仕事が必要になってきます。自分の力が発揮できる時にぜひボランティアに参加してほしいと思います。

私は、明日からまた出かけます。避難所の人たちとは、家族同様のおつきあいをしてきました。「必ずまた来て」と言われているので行ってきます。

《4月初旬のアンケートより》

3月11日 学校では

校庭避難中、強い揺れに不安をいただきパニックになりそうな自分を必死に我慢している生徒、泣きじゃくっている生徒、それを介抱している生徒、一応のおちつきがあったもののこれ以上のことがおきたらと不安でした。(東久留米・中学校)

校舎が老朽化しており、2階の職員室でも激しく揺れました。校内での窓ガラスも何箇所もわれました。市内のあちこちの学校でもガラスがわれたと聞いています。(西東京・中学校)

職員が引率して一斉下校をしました。途中、地域の人たちが声をかけてくれて安全に子どもたちを自宅まで送り届けてくれました。

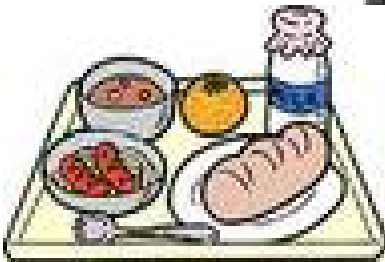
わが子を自転車で迎えにいったからまた学校にもどりました。勤め先が近かったから助かりました。



その後の影響は？



備蓄用品の見直しが必要だと思います。(食料・トイレ紙・電池など)
(各市の学校から)



5年の清里の移動教室は宿泊場所が避難所になっているので中止。6年の鶴原移動教室も津波の心配などで中止になった。小学校の宿泊行事がなくなったので1泊でもできる方法を検討中。(小金井・小学校)

【他市でも千葉県海の移動教室が中止になっています。】

食材が調達できない・計画停電の影響で調理・片付けが出来ない・・・などの理由で給食が中止になった市がいくつもありました。

自校給食は復旧が早かったが、大量に食材を仕入れるセンター給食校は給食の再開が遅れたなどの声も寄せられました。

また、金町浄水場の報道の後、家庭の判断で水筒を持たせる事態になりました。

学校・地域・行政への提言

1．子どもの安全を守る学校の施設・設備について

学校

- ・今回の教訓をもとに、教職員・保護者・地域の方々の声を集めて、非常時の対応の見直し。
- ・学校の検討結果を保護者に説明し、理解と協力を得るための方策の具体化。
- ・非常時の学校の施設・物品・設備の見直しと、市教育委員会への要望のとりまとめ。

市の教育委員会

- ・今回の地震で市内のどの学校でどんな被害が出たのか、その対応策について教育委員会が情報の公開を行うこと。
- ・学校・PTA 関係者・職員団体等から要望を聞き、懇談する機会を持つこと。
- ・保護者の勤め先の関係（日によって勤務先が変わる・遠方）などの実態から長時間子どもを預かることが予想されます。その実態に即した備品・設備を整備すること。
- ・学校の耐震診断と耐震補強工事等の推進。

2．避難所としての学校「安心・安全の拠り所に」

市の教育委員会

- ・地域の避難所として機能を果たすための食糧・毛布・その他の用品の整備を見直すこと。
- ・非常時には、学校が地域の拠り所になります。地域の人に支えられてこそ機能を果たせます。教職員の引率で一斉下校をした学校で、近所の方々が声を掛けて子どもを自宅まで安全に送り届けることが出来た例があります。「学区自由化」「学校選択」「学校統廃合」など地域と学校の結びつきを弱めるやり方を抜本的に見直してください。

都の教育委員会

- ・公務員として教職員は、避難所としての学校を運営する役割を果たすことが求められます。そのために職住接近＝60分以内の学校で働けることを基本に人事異動要項の抜本的に見直してください。
- ・東京都の震災予防条例の「自己責任原則」をもとから見直し、「福祉・防災のまちづくり」を都政の柱になるようにしてください。

政府と文部科学省

- ・福島県の子どもたちが、安全に学校生活を送れるようにしてください。当面、校庭の放射線基準を専門家の意見をふまえて保護者・子どもたちが安心できるようにしてください。
- ・原発の放射能汚染の危機から命とくらしを守るために、情報公開と政府の責任で科学技術を総動員する体制を求めます。ヨーロッパに学び自然エネルギー 中心にしたエネルギー政策への切り替えの方向性をうちだしてください。